

氏名	たにぐち こうじ 谷口 幸司
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	甲第453号
学位授与年月日	平成15年 9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	<b>Lack of marital support and poor psychological responses in male cancer patients</b> (男性がん患者における、婚姻によるサポートの欠如と、否定的な心理反応)
学位論文審査委員	(主査) 川原 隆 造 (副査) 三原 基之      清水 英 治

## 学位論文の内容の要旨

配偶者の存在は、ストレスに対する心理反応を緩衝する社会的関係の根本的なものである。これまで、配偶者の存在が精神的苦痛やコーピングに及ぼす影響を、がん患者を対象に検討した研究はきわめて限られており、結果も一定ではない。さらに、社会的な出来事に対する心理面の脆弱性に男女間で差があることが指摘されているにも拘らず、性差に着目して、配偶者の存在が精神的苦痛やコーピングに及ぼす影響を考察した研究が全くない。

従って、我々は、配偶者の存在および配偶者のサポートの認識が、精神的苦痛とがんへのコーピングに及ぼす影響について、外来通院中のがん患者を対象に検討した。

### 方 法

国立がんセンター東病院外来に通院するがん患者を対象に、インフォームドコンセントを得た後に、研究者が構造化面接によって、配偶者の有無、配偶者からのサポートの認識の有無、年齢、職業の有無と種類、独居か否か、教育歴などの社会的因子について聴取した。そして、精神的苦痛とがんに対するコーピングについて、Profile of Mood States (POMS)と Mental Adjustment to Cancer Scale (MAC)の二つの尺度を用いて、横断的に評価した。Performance status (PS)、がんの部位、ステージなどの身体的因子については、患者の担当医である身体科の医師が評価した。

統計解析に際しては、男女それぞれの集団を別個に解析した。単変量解析として Mann-Whitney test を行った。その際、配偶者の有無、および配偶者からのサポートの認識の有無、また上記の社会的・身体的因子をそれぞれ二区分変数として独立変数に、また POMS の下位尺度の合計点数で、精神的苦痛を表す POMS-TMD の点数と、MAC の下位尺度のうち、前向きなコーピングを表す Fighting spirit と絶望的なコーピングを表す Helplessness/hopelessness の点数 (連続変数) を従属変数にした。さらに、配偶者の有無、および配偶者からのサポートの認識の有無の、精神的苦痛とがんに対するコーピングに与える影響を検証するために重回帰分析を行った。その際、単変量解

析において POMS-TMD、Fighting spirit、Helplessness/hopelessness に有意な相関を認めた身体的・社会的因子を補正因子として投入した。

研究の遂行に先駆けて、国立がんセンター倫理委員会の承認を得た。

## 結果

調査は 1996 年 5 月から 6 月にかけて行われた。適格患者は男性 321 名、女性 326 名で、最終的な参加者は男性 272 名、女性 252 名であった。

男性の外来通院中のがん患者では、配偶者がいない患者では、配偶者がいる患者に比して、精神的苦痛を表す POMS-TMD の点数が有意に高く ( $P=0.006$ )、前向きなコーピングを表す Fighting spirit の点数が有意に低かった ( $P=0.000$ )。また配偶者のサポートを認識していない男性がん患者では、それを認識しているがん患者に比して、Fighting spirit の点数が有意に低かった ( $P=0.009$ )。しかし、女性の外来通院中のがん患者では、配偶者の有無、配偶者のサポートを認識しているか否かは、精神的苦痛や、前向きなコーピングあるいは絶望的なコーピングに影響しなかった。

## 考察

男性の外来がん患者にとって、配偶者がいないことは精神的苦痛と前向きなコーピングに有意に不利に影響し、配偶者のサポートを自覚していないことは、前向きなコーピングに有意に不利に影響した。このことは、配偶者の存在が、男性の外来がん患者においては精神的苦痛を軽減し、前向きなコーピングを高めている可能性を示唆し、女性では配偶者の存在が男性ほど大きな影響を持たない可能性を示唆した。男性と女性では、ソーシャルサポートの源泉に（例えば、配偶者、子供、友人など）違いがあることが類推されるとともに、男性では配偶者がいることや配偶者のサポートを認識している事が精神的苦痛やがんへのコーピングに有利に影響することを介して、生存期間に影響を与えている可能性について検証することが望ましいと考えられた。

## 結論

配偶者がいないことは、男性の外来がん患者でのみ精神的苦痛を有意に高め、前向きなコーピングを有意に損なった。また、配偶者のサポートを認識していないことは、男性の患者でのみ、前向きなコーピングを有意に損なった。しかしながら女性の外来がん患者では、配偶者の有無、配偶者からのサポートの認識の有無は、精神的苦痛や、前向きあるいは絶望的なコーピングに影響しなかった。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は国立がんセンター東病院外来に通院中のがん患者を対象に、配偶者の存在および配偶者のサポートの認識が、精神的苦痛とがんへのコーピングに及ぼす影響について、構造化面接および、Profile of Mood States と Mental Adjustment to Cancer Scale の二つの自記式質問票によって、男女別に検討したものである。その結果、第一に、配偶者がいないことは、男性の外来がん患者でのみ精神的苦痛を有意に高め、前向きなコーピングを有意に損なうこと、第二に配偶者のサポートを認識していないことは、男性の患者でのみ、前向きなコーピングを有意に損なうこと、第三に、

女性の外来がん患者では、配偶者の有無、配偶者からのサポートの認識の有無は、精神的苦痛や、前向きあるいは絶望的なコーピングに影響しないことが示された。本研究は、精神腫瘍学の分野で、配偶者の存在および配偶者のサポートの認識が、精神的苦痛とがんへのコーピングに及ぼす影響に男女で違いがあることを示し、またがん患者を対象にした社会心理学的な研究に性差の視点が重要であることを示唆した点で、明らかに学術水準を高めたものと認める。